

謎の長頸瓶「壺G」と古代のムラの祈りの姿～殿内遺跡の「壺G」展示に関連して～

藤 由美

2017年7月27日、八千代市立郷土博物館の近くの発掘調査現場で、取り上げたばかり長頸瓶の『壺G』を手にした。

それは殿内遺跡の一角 f 地点の奈良・平安時代の竪穴建物跡からの出土で、まだ土の湿り気をまとったまま、夏の日差しの下で鈍く光っていた。



用途不明の謎の須恵器「壺G」とは？

八千代市立郷土博物館には、市内の古代遺跡「村上込の内遺跡」と萱田遺跡群の「北海道遺跡」からした出土した長頸瓶が二点、展示されている。このほか萱田遺跡群の「井戸向遺跡」からも同形の須恵器の壺Gが出ていて、2017年夏の新発見の壺は、市内4例目の「壺G」であった。

壺Gとは、頸が長い高さ20cm位のほっそりとした長頸瓶のことで、自然釉がかかった優雅で堅牢な須恵器である。奈良文化財研究所が、須恵器の壺の形状をアルファベット順に分類した際、「G類」に定められた須恵器であることから、「壺G」とよばれる。器形は、太型・中太型・細型に分類され、細型の時期は784～794年の長岡京の時代に限定される特徴がある。ほとんどが平底で、糸切痕やロクロ回転痕を未調整のまま残すなど、やや雑なところにかえて素朴で味わい深いおもむきがある。

私が、「壺G」の用途に興味を抱いたのは、2007年、国立歴史民俗博物館（歴博）で開催された企画展示「長岡京遷都－桓武と激動の時代－」に、村上込の内遺跡の壺Gが、武蔵

国府や佐倉市、酒々井町から出土した壺Gなどと並んで展示されていたことからだった。

村上込の内遺跡は、「古代のムラ」として注目された遺跡で、歴博には、そのムラの様子を再現したジオラマが開館当時の展示されている。

「長岡京遷都」展では、壺Gの用途について「東北遠征軍隊の水筒」と解説されていたことには驚いた。「水筒説」は長岡京跡の調査に携わった山中章氏の説で、関東から東北への分布と、「堅牢で、ひもで肩からつり下げるのに適した形」、「東北の城柵から少量の発見例があり、桓武朝における東北遠征にともなう兵士や都から下る官人の携行品である」という。竹筒や皮袋に比べ、重そうなのに内容量は少な目で使いづらそう、というのが、その時の私の率直な感想だった。

また以前、2002年に訪ねた藤枝市立郷土博物館での志太郡衙跡に関する展示では、出土した荷札木簡の記述から、壺Gを『<sup>かつお</sup>堅魚煎汁』の貢進のための容器」として、壺Gを2個一括りにし、再現した荷札木簡を付けてあった。

この堅魚煎汁容器説は、巽淳一郎氏が1991年発刊の『新版 古代の日本 近畿Ⅱ』などで述べられている。

「壺Gは仏具花瓶」説と出会って

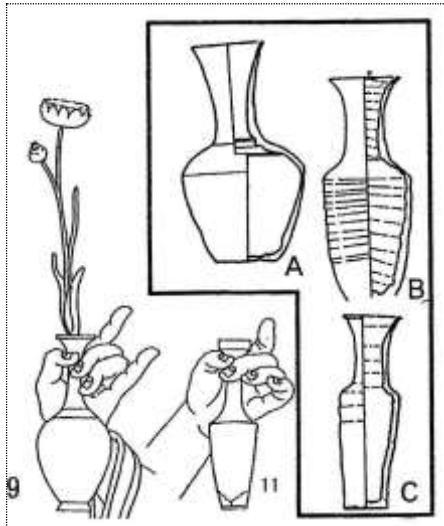
2007年10月、静岡県埋蔵文化財調査研究所で、佐野五十三所長に壺Gの用途をテーマしたお話を聞く機会があった。

佐野さんの説は仏教用具としての「花瓶」説。仏像・絵画などの資料に残る花瓶を検討整理する中で、観音像の持つ古代花瓶の形状と須恵器壺Gの変遷の関連を分析し、その形態と時期が一致することを指摘され、「仏の手を離れて自立式となり、花活けの花瓶となっ

た須恵器こそ壺Gである」と述べられた。

佐野さんはまた、壺Gと出土した遺跡の分布の関連を整理し、「壺Gは、古代の公的な施設・機関に関係する遺跡が圧倒的に優位であること」、「集落からの出土も一般的」で、東国では竪穴住居から奈良三彩・金銅仏などが出土していることも指摘された。

図 仏像の持つ花瓶と壺G



9：奈良法輪寺、11：靈山寺の十一面観音  
(佐野五十三氏の図の一部を抜粋)

さらに、千葉県袖ヶ浦市遠寺原遺跡・山梨県韮崎市宮ノ前第Ⅱ遺跡、群馬県佐波郡十三宝塚遺跡の壺G出土遺構と遺跡全体の様相を例示し、壺Gが村の寺や仏堂などの遺構に付随する遺物であること、そして行基のような僧を介した東国へ仏教伝播とともに、その分布も広がったと述べられた。

この佐野さんの花瓶説で、壺Gが出土した遺跡を見直してみよう、遺構や遺物を古代仏教との関連で分析したら、遺跡の性格と同時に、壺Gの用途も解明できるかもしれない。まずは、素人の私でもできる検証は、分厚い発掘調査報告書から地元の遺跡のデータに向き合うことだった。

表 千葉県の壺G出土遺跡と仏教関連遺物

	遺跡名	市町名	出土仏教関連遺構・遺物
1	海神台西	船橋市	墨書土器「岑寺」
2	北海道	八千代市	墨書土器「勝光寺／大田」・「尼」・「経」
3	井戸向	八千代市	仏鉢、三彩托、三彩小壺2、銅造宝冠如来像、山吹双鳥鏡、墨書土器「寺坏／寺」・「寺」・「佛」、火打金
4	庄作	芝山町	仏鉢、瓦塔、墨書土器「井／佛西」
5	真行寺廃寺	山武市	仏鉢、浄瓶、香炉蓋、瓦塔、墨書土器「武射寺」・「大寺」・「仏工舎／小」、文字瓦「寺／寺口」
6	台畑	千葉市	墨書土器「寺吉」・「寺」他
7	南河原坂窯跡群	千葉市	仏鉢、水瓶、香炉蓋、高坏形香炉、墨書土器「塚寺／上」
8	川島	富津市	水瓶、香炉蓋、高坏形香炉
9	柳台	匝瑳市	仏鉢、浄瓶、墨書土器「千俣口(仏カ)」
10	草刈	市原市	灰釉浄瓶、薬壺、佐波理製箸、墨書土器「草苅於寺坏」
11	永吉台	市原市	四面庇建物、瓦塔、仏鉢、銅鏡、香炉蓋、墨書土器「土寺」・「田寺」・「山寺」・「寺」
12	坊作	市原市	墨書土器「法花寺」・「佛騰」・「造寺」
13	高岡大山	佐倉市	四面庇建物、銅鏡、瓦鉢、香炉、墨書土器「寺」・「佛」・「神」
14	臼井屋敷跡	佐倉市	三彩托、総柱建物
15	村上込の内	八千代市	仏鉢、瓦塔、灯明皿、火打金、墨書土器 他多数
16	谷津貝塚	習志野市	瓦塔片、灯明皿、墨書土器「中村寺」

(この表の1～8は、佐野さんの論文「須恵器花瓶の成立」『静岡県考古学研究』No.30 1998でも例示されている遺跡、9～16は、私が拾い出したデータ)

## 壺 G 出土の千葉県の遺跡をみる

「壺 G は仏具の花瓶」という説を検証するため、千葉県内の遺跡の調査報告書から、壺 G 出土の遺跡とその遺跡から複数出土した仏教関連の遺物をリストにしてみた。

その結果 G 壺が出土した遺構やその近辺のほとんどで、「寺」「仏」銘の墨書土器・仏鉢・三彩の托や壺・水瓶・香炉・瓦塔などの仏教関連の遺物が出土し、またお堂を思わせる四面<sup>ひさし</sup>庇建物跡や総柱建物跡が検出されている事例もあった。中でも 10 の草刈遺跡の壺 G は、浄瓶や薬師如来の持つ薬壺など多くの遺物と共に、一つの住居跡から出土していた。

このほか、墨木戸遺跡（酒々井町）・駒形遺跡（千葉市）・根崎遺跡（千葉市）からも、壺 G が出土しているが、発掘調査報告書の中で、壺 G を仏器の一器種として遺跡の性格の考察を試みていたのは、『墨木戸遺跡（第 2 次）』（1999）だけであった。

## 八千代市の村上と萱田の古代遺跡では

さらに、八千代市の村上込の内遺跡と萱田遺跡群遺跡についての報告書から、遺跡中の壺 G の出土状況を見直し、仏教関連とおぼしき遺物・遺構を拾い出して、遺構実測図の上に壺 G とプロットする作業をしてみた。

村上込の内遺跡は、古代の「村神郷」の一部とされるひとつのムラで、この遺跡の古代集落は、出土した土器から、8 世紀前半～9 世紀後半の約百五十年の間に、I～V 期の 5 段階の変遷をたどったとのこと。この 8 世紀前半という時期は、養老 7 年（723）「三世一身法」の施行により、郡司層による開墾が進み始めたころである。

この時期の住居跡 155 軒と掘立式建物跡 24 棟は、集落中央の住居のない広場の周りに、A～E まで 5 つのブロックに分かれて展開している。墨書土器は 270 点、D 群では「来」・「毛」の字など、同じ文字の土器がブロック単位でまとまって出ていることから、一族の

ような単位集団が何世代かにわたって同じブロックに住み続けたとのこと。このムラは 8 世紀後半から 9 世紀前半にかけて最盛期となり、9 世紀後半には家数が減少、そして 10 世紀頃には生活の痕跡が消えていったという。

村上込の内遺跡について、千葉県史や八千代市史が仏教関連の遺物としているのは、A 群の北の谷の縁から出土した瓦塔の破片のみであるが、宗教関連と思われる遺物を、報告書からさらにピックアップしてみた。

その結果、A 群では長頸瓶、「奉」・「前升」銘の墨書土器・掘立建物 3 棟、B 群では灯明皿、C 群では太型の長頸瓶と掘立建物 4 棟、D 群では完形の壺 G ほか太型・中細型頸部・胴部破片など須恵器の長頸瓶が計 7 個体、灯明皿、「聖」銘の墨書土器と掘立建物 13 棟、E 群では掘立建物 4 棟が検出されていた。

墨書の「前升」の「升」は「菩薩」の文字の冠の略、また古代の「聖」は「釈迦ないし

また、D 群からは、官人の存在をうかがわ仏法の徳を秘めた聖人」を意味する。せる帯金具や刀子や掘立建物なども見つかっている。この D 群には「来」の墨書で土器を区別する有力な一族が存在し、村上込の内の集落全体をリードしていて。その単位集団内には、お堂もあって、灯明を捧げ、花を供えて、仏を礼拝する人々の生活が営まれていたのではないかと思われる。

一方、新川西岸の萱田遺跡群の構造については、笹生衛さんが「古代仏教信仰の広がり」と受容」（『神仏と村景観の考古学—地域環境の変化と信仰の視点から』2005）の中で、古代仏教施設を「寺院」・「寺」・「堂」に分類整理し、「集落内の仏堂・仏教関連遺物のあり方」の事例として明らかにしている。

萱田遺跡群で明確に仏教信仰の跡を確認できるのが、白幡前遺跡 2 群 A 内の南側の遺構で、ここには周囲が溝で区画された四面庇の掘立建物があり、瓦塔・瓦鉢・浄瓶・「寺」や「佛」銘の墨書土器などの遺物が集中して

いることから、集落全体の「村寺」といえる仏教施設があったと考えられている。

このブロックの北隣の白幡前遺跡Ⅰ群Bと、寺谷津の北側の井戸向遺跡第Ⅰ群では、単位集団に付属した一族の持仏堂があり、白幡前遺跡の他の2つのブロックと井戸向遺跡第Ⅱ群では一族の内に仏教に帰依した人物がいた程度、さらに北の北海道遺跡では「勝光寺」の墨書土器のみで仏具類は確認できず、権現後遺跡では仏教関連の遺物は全く見られないとのことである。

萱田遺跡群では、白幡前遺跡2群Aブロックの「村寺」を拠点として単位集団ごとに仏教信仰が浸透していき、このブロックから離れた北海道遺跡から権現後遺跡にかけては次第に希薄になると笹生さんは考察されている。

壺Gを検出した井戸向遺跡や北海道遺跡など、「村寺」から離れた集落でも、小さなお堂、または住居内に仏の小像や絵を祀り、一輪の花を壺Gに入れて供えていたのではないだろうか。

### 壺Gとの新たな出会い

当会の2013年の調査研究テーマ「旧村上村の総合研究」で、「村上込ノ内遺跡と同遺跡出土の長頸瓶（壺G）について」を私は『史談八千代』第38号に投稿した。

その後、新たに壺Gに出会ったのは、2014年1月、習志野市の総合教育センターでの「谷津貝塚出土資料展示会」であった

習志野市の津田沼駅南口の区画整理地区で行われた発掘調査で、奈良～平安時代の集落跡中心の遺跡である「谷津貝塚」の全容が明らかになり、それらの遺物とともに、古代集落跡から出土した壺Gも、瓦塔など仏教関連遺物と共に展示されていた。

さらに2017年7月習志野市の小企画展「どうしてこのカタチ？～モノからわかる奈良・平安時代の谷津貝塚～」では、「花瓶」説を有力な説として評価し、「8世紀から9世紀初

頭、古代仏教が地方へ波及するに伴って寺院などに供えられたもの」と解説されていた。さらに同じ遺構から出た油煙の残る土師器を灯明具として仏教祭祀が行われた可能性と、墨書土器銘の「中村寺」との関連もうかがえると考察されていた。

### 「殿内遺跡 f 地点発掘調査報告書」では？

上記報告書では「f 地点では9世紀初頭～10世紀の竪穴住居5棟が検出されている。」また壺Gの出た「02Dの遺構からトータル603点出土しているが、覆土中の出土が主体である。」(P6)、さらに「02D出土の細頸壺（平城宮分類壺G）が覆土下層から出土している。仏教系遺物とも想定されるが、今回それを裏付ける証左は見られない。今後の課題である。」(P18)と述べている。

殿内遺跡全体a～j地点で、奈良平安時代の竪穴建物跡は70棟（うち博物館敷地b地点36棟）、掘立柱建物跡数棟が検出されているが、報告書の遺物の図版と解説を見ても古代仏教系遺物は特に検出されていない。

8世紀末～9世紀初頭の壺Gが、9世紀初頭～10世紀の遺物とともに、覆土中にあったことを考えると、壺Gは伝世されて別用途に再利用された後、日常雑器として一括で廃棄されたのではないだろうか。

### おわりに

素朴な疑問から発した「壺G」の用途の検証であるが、出土した多くの遺跡の性格から、「仏の御手の花瓶からその形をいただいて、仏の御前に供えるための花瓶となった須恵器」だったと思う。

殿内遺跡ではそのような遺跡の性格は判明できなかったが、この遺跡の台地の裾には鎌倉時代の清凉寺式釈迦如来像を伝える正覚院がある。殿内遺跡の未調査の区域と持田遺跡や境作遺跡などの隣接地を含めた遺跡全貌の解明を待ちたい。